

天皇の退位・即位関連儀式・行事の 中継視聴と日本人意識・ コスモポリタニズム意識との関係

有馬 朋 恵

私たちはテレビをはじめとするメディアで伝えられる出来事やニュース、ドラマなどでの表象やステレオタイプ的な描写を通して、自身や他国の人々の国民性や愛国心、また自身のアイデンティティを再確認する。特に自国という社会的集団との関連から派生する「私は日本人である」といった自己概念は Tajfel and Turner (1986) が提唱した社会的アイデンティティであり、他の国の人々との比較から自分たちの優位性を感じれば肯定的な社会的アイデンティティが達成されるだろう。世界中の人々が 2020 年より対峙し続けている COVID-19 に関していえば、2020 年前半の日本の感染者数は他の先進諸国よりも少なかった。その要因の 1 つとして手洗いうがいや家の中で靴を脱ぐといった日本人の生活習慣が指摘され (Iwasaki and Grubaugh, 2020)、テレビの情報番組等における専門家によるこうした解説、またそれを知った政治家が日本人の民度の賜物と述べたことも各種メディアで報道された¹。このような情報は他の国の人々よりも日本人が優れていることを示すものであり、日本人の中には日本人であることを誇らしく思った人も少なくなかったのではないか。

他方、テレビなどから伝えられる情報によっては、私たちは自国のことだけでなく世界のことに目を向けることになる。今日はヒトも物も国境を越

¹ 麻生太郎財務大臣 (当時) が 2020 年 6 月 4 日の参議院財政金融委員会で、日本で新型コロナウイルス感染症による死者が欧米主要国よりも少ないのは「民度のレベルが違う」からであり、この認識は国際的にも「定着しつつある」と発言し、物議を醸した (斉藤, 2020)。

えて行き来するグローバル社会と言われ、日本から外国へは政府開発援助（ODA）や食糧支援、企業の海外進出、カワイイ文化の席卷、旅行・留学目的で海外へ渡る日本人がいる。外国からは日本が輸入に頼るエネルギーや食糧の他さまざまなものが輸入され、旅行、留学、技能実習など多様な目的で来日する人たちがいる。こうした現状を知れば知るほど、日本は今後も他国と共存共栄していくべきだと認識するようになるのではない。

「メディア利用と日本人意識」研究会²では、以上のような問題意識から、日本人のメディア利用の実態と日本や外国に関わる意識との関係を検討するために調査研究を継続して行っている。本稿では、2019年の4月から11月まで行われた平成から令和への天皇の代替わりに関わる儀式・行事の特別報道番組の視聴と日本人意識・コスモポリタニズム意識との関係に焦点を当てる。2019年4月1日の元号発表、同月30日の天皇（現上皇）の退位、5月1日の天皇（今上天皇）の即位、10月22日の即位礼正殿の儀、11月10日の祝賀パレードについては、テレビで特集番組が組まれた。メディアの中でも老若男女を問わず手軽に利用することができるテレビがリアルタイムで中継するメディア・イベントを日本人はどのように視聴したのか。またそうした視聴は日本人意識・コスモポリタニズム意識とどのような関係にあるのかを明らかにする。日本人意識としては、日本人の条件、ナショナリズム・愛国心、日本の誇り、皇室への意識を扱う。

皇室への意識を取り上げるにあたり、日本人にとって天皇はどのような存在であるかを簡単に紹介しておこう。天皇制度は日本独自のものであり、ヨーロッパ各国に現存する王室制度とは異なる。また、元号は皇位継承があった場合にのみ政令によって改められ、通常は天皇の崩御に伴い行われるものである。平成から令和への皇位継承は、平成天皇の強い希望により特例

² 2019年に発足。日本人アイデンティティと関連する可能性が高いと考えられる日本礼賛番組、天皇の代替わり報道、オリンピック・パラリンピック、ワールドカップなどの競技・試合視聴を題材に研究を続けている。メンバーは筆者の他に、山下玲子（東京経済大学）、志岐裕子（慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所）、藤井達也（武蔵大学）である。

として存命中に行われた。存命中の代替わりについては、喪に服す中で行われた過去の物とは異なり、祝賀ムードが強くテレビ各局でも程度の差はあるものの肯定的に捉えられていた（有馬，2020）。テレビ報道におけるお祝いムードは新元号が発表された4月1日に顕著であった。各局は日本史や天皇研究の専門家、皇室とゆかりのある人々、政治部のキャップなど錚々たるメンバーをスタジオゲストとして迎え、元号に関する解説、街の人々の声のみならずSNS上での書き込みに見られる慶びの声を取り上げ祝賀ムードを演出した。また、元号は世界のどの国にもない日本固有のものであることが強調された。こうした元号に関する解説、またほとんどの人がテレビでしか見ることでできない天皇皇后はじめ皇室の人々の立ち居振る舞いは、多かれ少なかれ日本人の日本人アイデンティティに影響したものと思われる。

NHK放送文化研究所（2019）が1973年より5年おきに行っている調査の中で、天皇に対して「尊敬の念をもっている」「好感をもっている」「反感をもっている」「特になんとも感じていない」のうちどの気持ちを抱いているか尋ねるものがある。昭和（1973～1988年）時代には「特になんとも感じてない」が最も大きな割合を占め4割を超え、「尊敬の念をもっている」「好感をもっている」が続いていた。しかし、平成になって最初の調査（1993年）では、「特になんとも感じていない」（34%）を「好感をもっている」（43%）が逆転し、「尊敬の念をもっている」（21%）の占める割合は低下した。その後、平成時代には「好感をもっている」と「特になんとも感じていない」が拮抗する中、「尊敬の念を感じる」の割合が徐々に上昇し2018年調査では41%と最も大きな割合を占めた。一方、「特に何も感じていない」は22%まで低下した。皇太子時代から昭和天皇の名代をさまざまところで務めていたことが広く知られている平成天皇は、天皇としての役割を遂行する中で日本人が抱く天皇のイメージを変えたといえる。日本の人々は、このような平成天皇に対する気持ちをどのように令和の天皇に対して引き続き抱き続けているのであろうか。この問いに対する答えは、日本のシンボルにふさわしい天皇像を天皇・皇室が自ら演出しているか、それがメディ

アで伝えられているのかを解明するともいえよう。

以上を踏まえ、本稿では平成から令和への天皇退位・即位関連の儀式・行事に日本人はテレビ各局が放送した特集番組を通してどの程度参加したのか、そのようなメディア・イベントへの参加と日本人意識・コスモポリタニズム意識はどのように関連しているのかを2019年11月に行った調査のデータの一部を用いて明らかにする。

方 法³

調査対象 20歳以上の日本在住の日本人299名（男性144名、女性155名）。

手続き 2019年11月19日～20日にクラウドソーシングサービスLancersを通じて募集した調査協力者が、自分自身のPCや携帯電話などで回答した。

調査項目 紙幅の関係で本稿の分析で使用した項目についてのみ説明する。なお、デモグラフィック項目として、性別、年齢、学歴、職業、婚姻形態、子供の有無、海外居住経験とその期間を尋ねた。

(1) 改元に関する天皇・皇室関連報道の接触経験

新元号をいつ、どのように知ったか（3項目）、退位礼正殿の儀、剣璽等承継の儀、即位後朝見の儀、即位礼正殿の儀、祝賀パレードをテレビでリアルタイムで視聴したか、視聴した場合どの部分を視聴したか（10項目）

(2) 日本人・コスモポリタニズム意識

日本人の条件は、田辺ら（2016）に5項目を加えた「日本で生まれたこと」「日本の政治制度や法律を尊重していること」などの8項目を「全く重要でない」～「とても重要だ」の4件法で訊ねた。ナショナリズム・愛国心は、Karasawa（2002）の「日本人であることを誇りに思う」「日本が戦後驚異的な成長を遂げたのは、日本人が勤勉であったからだ」な

³ 調査は東京女子大学人を対象とする研究に関する倫理審査委員会（承認番号：A2019-10）および東京経済大学コミュニケーション学部・大学院コミュニケーション学研究科調査・実験等研究倫理小委員会（承認番号2019-01）の承認を受けて行われた。

どの15項目について「全くそう思わない」～「非常にそう思う」の7件法で訊ねた。日本の誇りは辻(2008)から「日本の社会保障制度」「日本の民主主義の現状」など13項目を抜粋し、「全く誇りに思わない」～「とても誇りに思う」の4件法で訊ねた。皇室については、親しみと尊敬を尋ねた。親しみは、「全く親しみを感じない」～「とても親しみを感じる」の4件法に加え「わからない・無回答」の5択で、尊敬は「全く尊敬しない」～「とても尊敬する」の4件法に加え「わからない・無回答」の5択で回答を求めた。天皇に期待する役割は、「宮中祭祀など伝統を守る」「地震や水害などの被災地を訪問するなどして国民を励ます」などの8つの活動について期待するものをすべて選択してもらった⁴。

(3) コスモポリタニズム意識

岩田(1998)のコスモポリタニズム意識(「外国の生活や文化に触れると感動する」「民族や文化に優劣はない」の11項目)に「自分の同僚やクラスメートに外国人が増えることに不安を感じない」「隣人が日本人であるか外国人であるかは気にしない」の2項目を加えた13項目について、「全くそう思わない」～「非常にそう思う」の7件法で回答してもらった。

結 果

ここでは、改元関連の儀式・行事へのテレビでの接触経験を明らかにし、さらにそれらのメディア・イベントの視聴経験による調査協力者のタイプ分けを行う。また、日本人意識・コスモポリタニズム意識を測定する尺度の検討を行った上で、メディア・イベントの視聴経験とそれらの意識との関係を検討する。

⁴ 天皇・皇室に関わることとして、女性皇族の地位(女性天皇、女系天皇、女性宮家)についても尋ねたが、本稿では分析しなかった。

改元関連の儀式・行事の視聴経験

2019年4月1日の新元号発表に始まった天皇の退位・即位に伴う一連の儀式・行事は、テレビでリアルタイムに中継されたメディア・イベントであった。崩御を伴わない退位・即位と改元であることから、各メディアは新しい時代が始まる区切りであり、慶ばしい気持ちで迎えるべきと報道した。では、国民はそれらのメディア・イベントに参加したのだろうか。

まず、元号発表については、8割以上の人たちがテレビ（148名、48.5%）またはSNSを除くインターネット（116名、38.8%）で知ったと回答した（図1参照）。また、リアルタイムで知ったと回答した人たちは約7割（97名、66.9%）であったことから、平日の昼間であったにも関わらず、テレビやインターネットを注視し新しい元号が発表される瞬間を待ち構えていた人たちがいたと推察される。

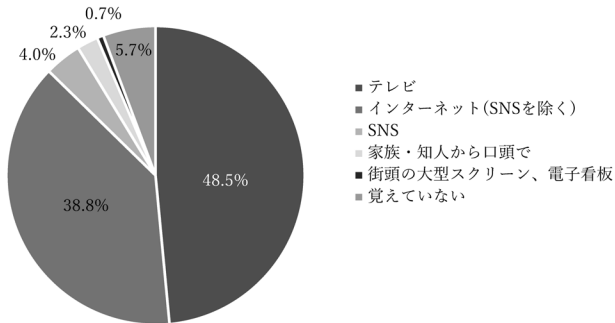


図1 新元号を知った手段

ところが、その後の一連の行事については、リアルタイムで視聴する人たちは半数にも満たなかった。「退位礼正殿の儀」では81名（27.1%）、「剣璽等承継の儀・即位後朝見儀」では52名（17.4%）、「即位礼正殿の儀」では93名（31.1%）、「祝賀パレード」では105名（35.1%）であり、国民にとってそれらは見届けなければならない大事なイベントではなかったといえる。

以上を鑑み、新元号の発表を除く改元関連の儀式・行事をテレビでリアルタイム視聴したか否かにより、調査協力者の分類を試みた。分類はクラスタ

分析（Ward法・2値ユークリッド平方距離）によって行い、3クラスタを抽出した（表1参照）。第1クラスタには147名（49.2%）が分類されたが、このクラスタの人たちはどの儀式・行事も視聴していなかった。第2クラスタには81名（27.1%）が分類され、「退位礼正殿の儀」を全員が視聴していた。その他の行事もクラスタの半数以上の人が常に視聴していた。第3クラスタには72名（23.7%）が分類されたが、「退位礼正殿の儀」を視聴した者はおらず、「剣璽等承継の儀」の視聴率も高くはなかったが、「祝賀パレード」を視聴した者が第2クラスタよりも多かった。以上の各クラスタの特徴から、第1クラスタから順に「非視聴群」「平成重視群」「令和重視群」と呼ぶこととした。

表1 各クラスタの儀式・行事視聴 人 (%)

	非視聴群 (147人, 49.2%)	平成重視群 (81人, 27.1%)	令和重視群 (72人, 23.7%)
退位礼正殿の儀	0 (0%)	81 (100%)	0 (0%)
剣璽等承継の儀	0 (0%)	41 (50.6%)	11 (15.5%)
即位礼正殿の儀	0 (0%)	56 (69.1%)	37 (52.1%)
祝賀パレード	0 (0%)	37 (52.1%)	51 (71.8%)

尺度の検討

日本人の条件、ナショナリズム・愛国心、日本の誇り、コスモポリタニズム意識についてそれぞれ因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行った。各因子の因子得点を算出し以後の分析で用いることとした。天皇に期待する役割は別の方法で検討を行ったため、該当箇所では詳述する。

日本人の条件では2因子が抽出された。第1因子は「日本で生まれたこと」「先祖に外国人がいないこと」など、第2因子は「日本の政治制度や法制度を尊重していること」「日本で税金を払っていること」などの因子負荷量がそれぞれ高かったため、第1因子から順に「民族性」と「法制度への忠誠」と命名した（表2参照）。

ナショナリズム・愛国心尺度では、3因子が抽出された。第1因子は「日本人で

表2 日本人の条件の因子分析（主因子法・プロマックス回転）の結果

	F1	F2	h^2
民族性			
日本で生まれたこと	.787	-.102	.558
人生の大部分を日本で暮らしていること	.660	.054	.471
先祖に外国人がいないこと	.576	-.011	.326
日本語が流暢であること	.553	.112	.361
法制度への忠誠			
日本の政治制度や法律を尊重していること	-.115	.796	.548
日本で税金を払っていること	.115	.490	.304
日本国籍を持っていること	.300	.370	.326
自分を日本人だと思っていること	.066	.352	.149
因子間相関	.447		

表3 ナショナリズム・愛国心尺度の因子分析（主因子法・プロマックス回転）の結果

	F1	F2	F3	h^2
愛国心				
日本人であることに、幸せを感じる	.965	-.085	-.010	.841
日本人でよかったと思う	.931	-.055	-.012	.802
日本が好きだ	.862	.035	-.010	.766
日本にはあまり愛着をもっていない	-.783	-.076	.114	.577
日本人であることを誇りに思う	.650	.088	.183	.691
日本の伝統・象徴重視				
「君が代」を聞くと気持ちが高まる	-.039	.849	-.054	.634
式典などで「君が代」を歌う必要はない	.083	-.740	-.033	.518
「日の丸」はすばらしい国旗	.181	.726	-.080	.615
神社・仏閣への参拝は日本人として望ましい	-.069	.520	.195	.388
天皇は日本の象徴としてふさわしい	.122	.430	.080	.318
ナショナリズム				
日本の発言権はもっとも大きくあるべき	-.161	.041	.755	.482
日本の貿易黒字は優れた技術と努力の結果	.124	-.069	.698	.541
日本はいろいろな分野で世界をリードすべき	-.070	.072	.684	.478
戦後日本の驚異的な成長は日本人が勤勉だから	.218	-.036	.579	.503
日本人は優秀な民族だとは思わない	-.127	-.213	-.354	.367
因子間相関		.535	.608	
			.636	

あることに、幸せを感じる」など、第2因子は「神社・仏閣に参拝することは日本人として望ましい」など、第3因子は「日本の大幅な貿易黒字は優れた技術と努力の結果である」などの因子負荷量がそれぞれ高かったため、第1因子から順に「愛国心」「日本の伝統・象徴重視」「ナショナリズム」と呼ぶことにした（表3参照）。

日本人の誇り尺度でも3つの因子が抽出された。第1因子では「伝統工芸」「歴史的建造物」など、第2因子では「日本人の人柄」「ポピュラー文化（アニメ、J-POPなど）」など、第3因子では「社会保障制度」「自衛隊」などの因子負荷量がそれぞれ高かったため、第1因子から順に「伝統」「人柄・文化」「制度」と呼ぶことにした（表4参照）。

表4 日本人の誇り尺度の因子分析（主因子法・プロマックス回転）の結果

	F1	F2	F3	h^2
伝統				
伝統工芸	.759	.066	-.052	.599
歴史的建造物	.668	.099	.015	.548
食文化	.527	-.038	.125	.331
自然	.427	.085	-.013	.225
人柄・文化				
日本人の人柄	.106	.541	.081	.437
ポピュラー文化（アニメ、J-POPなど）	.159	.467	-.173	.243
治安	-.044	.453	.130	.261
科学技術	.234	.425	.139	.473
民主主義の現状	-.187	.403	.390	.365
スポーツ分野での日本人の活躍	.253	.351	-.103	.237
制度				
自衛隊	.178	-.152	.636	.431
社会保障制度	-.128	.102	.540	.296
皇室の存在	.243	-.087	.463	.323
因子間相関		.594	.500	
			.565	

コスモポリタニズム意識尺度では4つの因子が抽出された。第1因子では「隣人が日本人であるか外国人であるかは気にしない」など、第2因子では「多くの国の文化や生活について知りたい」など、第3因子では「いかな

表5 コスモポリタニズム意識尺度の因子分析（主因子法・プロマックス回転）の結果

	F1	F2	F3	F4	h^2
異文化受け入れ指向					
隣人が日本人であるか外国人であるかは気にしない	.818	-.007	-.026	-.089	.586
同僚やクラスメートに外国人が増えることに不安を感じない	.778	-.043	.136	-.107	.632
もっと日本は外国に対して門戸を開放した方がよい	.730	-.003	-.091	.114	.539
外来文化を取り入れることは日本にとってプラスになる	.548	.076	-.037	.140	.420
異文化体験指向					
多くの国の文化や生活について知りたい	-.065	.946	.008	.016	.850
多くの違った国々に住んでみたい	.200	.648	-.064	-.025	.537
外国の生活や文化に触れると感動する	-.048	.637	.077	.053	.461
文化平等主義					
発展途上の貧しい国々も優れた文化を持っている	-.057	-.030	.901	.010	.738
いかなる民族も誇るべき文化を持っている	.060	.069	.657	.045	.573
民族や文化に優劣はない	.338	.054	.353	-.069	.377
地球運命共同体意識					
地球上の国々は運命共同体である	-.012	-.064	.095	.787	.646
裕福な国は貧しい国を援助すべきである	.132	.020	-.054	.600	.424
将来に備えていくら努力しても一国だけでは生き残れない	-.111	.097	-.018	.374	.139
		.566	.576	.442	
因子間相関			.518	.439	
				.482	

る民族も誇るべき文化を持っている」など、第4因子では「地球上の国々は運命共同体である」などの因子負荷量がそれぞれ高かったため、第1因子から順に「異文化受け入れ指向」「異文化体験指向」「文化平等主義」「地球運命共同体意識」と呼ぶことにした（表5参照）。

天皇の役割としてその遂行を期待するか否か訊ねた8項目については、クラスタ分析（Ward法・カイ2乗測度）を行い、2クラスタを抽出した。第1クラスタは「閣僚の認証や国会の招集などの「国事行為」に専念する」「国民体育大会などの国民的な催しに出席する」「研究活動を通じてグローバルな課題に取り組む」「その他」で構成されたため、「国事その他」と呼ぶこととした。第2クラスタは「外国を訪問したり外国の要人と面会したりする」「宮中祭祀など伝統を守る」「地震や水害などの被災地を訪問するなどして国民を励ます」「戦没者への慰霊などで平和を願う」で構成されていたため「寄

り添い・外交」と呼ぶこととした。それぞれのクラスタに分類された項目について「期待する」と回答した数の合計をそれぞれのクラスタの得点として、以後の分析に用いることとした。

退位・即位関連の儀式・行事の視聴と日本人・コスモポリタニズム意識の関係

ここでは儀式・行事視聴経験と日本人意識やコスモポリタニズム意識の関係を検討する。視聴経験によるクラスタを独立変数、日本人の条件の2因子、ナショナリズム・愛国心尺度の3因子、日本の誇り尺度の3因子、コスモポリタニズム意識尺度の4因子の各因子得点、皇室への意識の2得点、天皇に期待する役割の2クラスタの得点を従属変数として分散分析（Welch検定）を行った。

まず、日本人の条件では、民族性（ $F(2, 167.196)=3.143, p<.05, \eta^2=.023$ ）と法制度への忠誠心（ $F(2, 168.308)=3.193, p<.05, \eta^2=.022$ ）の両方でクラスタの主効果が認められた。多重比較を行ったところ、「平成重視群」は「非視聴群」よりも「民族性」（平成重視群： $M=.209, SD=0.92$ 、非視聴群： $M=-.110, SD=0.91$ ）、「法制度への忠誠心」（平成重視群： $M=.187, SD=0.82$ 、非視聴群： $M=-.110, SD=0.88$ ）の両方を日本人の条件として重視していることがわかった（図2参照）。

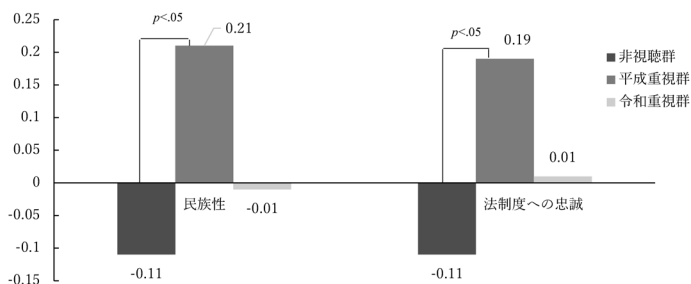


図2 日本人の条件の各因子のクラスタ別因子得点

ナショナリズム・愛国心では、愛国心（ $F(2, 178.744)=5.860, p<.01, \eta^2=.035$ ）、日本の伝統・象徴重視（ $F(2, 176.879)=10.801, p<.001, \eta^2=.063$ ）、ナ

シヨナリズム ($F(2, 180.419)=6.757, p<.01, \eta^2=.031$) でクラスタの主効果は有意であった。多重比較を行ったところ、愛国心と日本の伝統・象徴重視では「平成重視群」(愛国心: $M=.239, SD=0.71$ 、日本の伝統・象徴重視: $M=.331, SD=0.73$) は「非視聴群」(愛国心: $M=-.178, SD=1.13$ 、日本の伝統・象徴重視: $M=-.218, SD=1.03$) よりも有意に得点が高く、ナシヨナリズムでは「平成重視群」($M=.261, SD=0.65$) は「令和重視群」($M=-.049, SD=0.73$) と「非視聴群」($M=-.120, SD=1.08$) よりも有意に得点が高かった (図3 参照)。

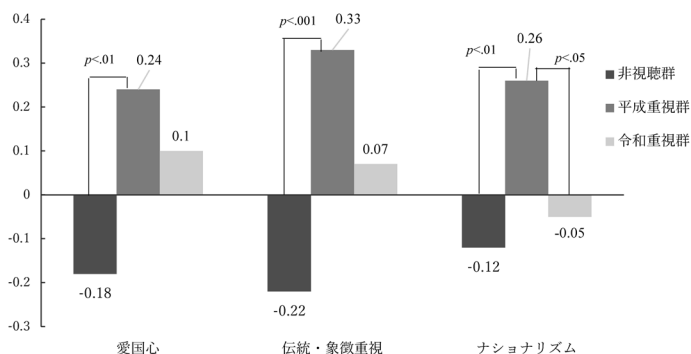


図3 ナシヨナリズム・愛国心のクラスタ別因子得点

日本の誇りでは、伝統 ($F(2, 173.320)=16.387, p<.001, \eta^2=.090$)、人柄・文化 ($F(2, 176.957)=6.269, p<.01, \eta^2=.040$)、制度 ($F(2, 174.152)=8.398, p<.001, \eta^2=.052$) でクラスタの主効果は有意であった。多重比較を行ったところ、伝統では「平成重視群」($M=.425, SD=0.74$) は「令和重視群」($M=-.035, SD=0.76$) と「非視聴群」($M=-.217, SD=0.96$) よりも有意に得点が高く、人柄・文化と制度では「平成重視群」(人柄・文化: $M=.231, SD=0.72$ 、制度: $M=.277, SD=0.73$) は「非視聴群」(人柄・文化: $M=-.164, SD=0.96$ 、制度: $M=-.176, SD=0.91$) よりも有意に得点が高かった (図4 参照)。

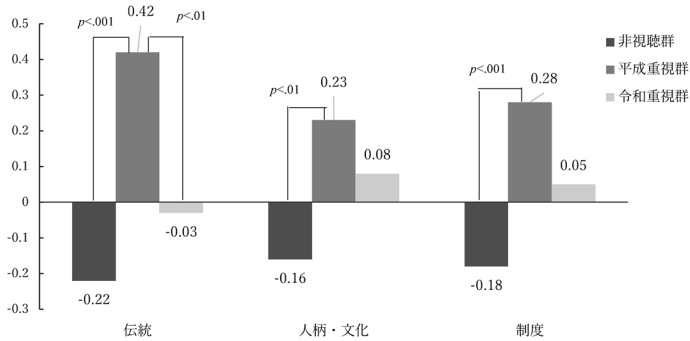


図4 日本人の誇りのクラスター別因子得点

皇室に対する意識について見てみよう⁵。まず、親しみ ($F(2, 169.671) = 17.657, p < .001, \eta^2 = .104$) と尊敬 ($F(2, 160.312) = 5.743, p < .01, \eta^2 = .038$) の両方でクラスターの主効果が有意であった。多重比較を行ったところ、親しみでは、「平成重視群」($M = 3.04, SD = 0.57$) と「令和重視群」($M = 2.86, SD = .66$) は「非視聴群」($M = 2.50, SD = 0.78$) よりも皇室により親しみを感じていた。尊敬では「平成重視群」($M = 3.24, SD = 0.63$) は「非視聴群」($M = 2.91, SD = 0.79$) よりも皇室をより尊敬していた (図5参照)。なお、親しみも尊敬も2.5点が中点であるため、どのような視聴パターンであっても概ね好意的な態度を皇室に対して抱いているといえよう。

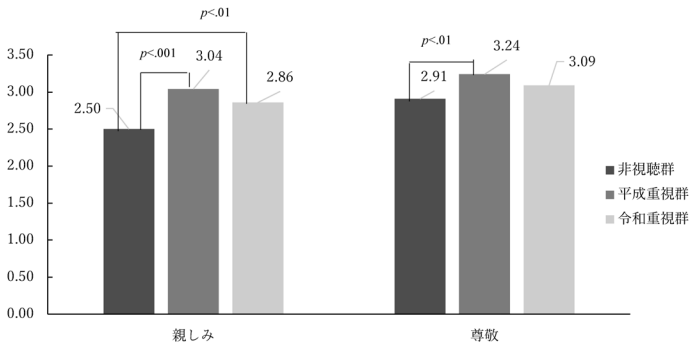


図5 天皇に対する親しみ・尊敬のクラスター別得点

⁵ 天皇に対する意識では「わからない・無回答」を選択した調査協力者がいたため、「親しみ」では289名、「尊敬」では277名の回答のみを分析対象とした。

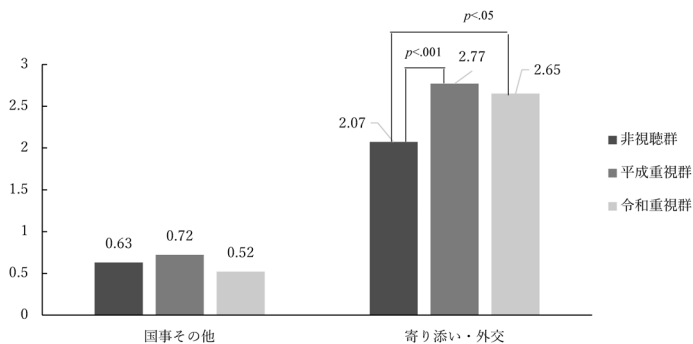


図6 天皇に期待する役割のクラスター別得点

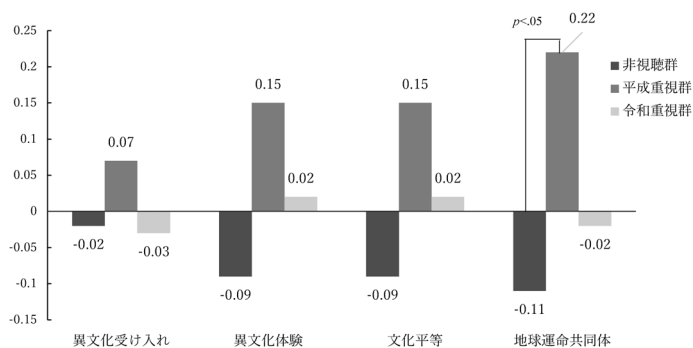


図7 コスモポリタニズムのクラスター別因子得点

天皇の役割に対する期待に視聴経験による差があるかを分散分析によって検討した。すると、「国事その他」では視聴クラスターによる主効果は認められなかった ($F(2, 166.034)=0.898, n.s., \eta^2=.005$)。一方、「寄り添い・外交」では視聴クラスターの主効果は有意であった ($F(2, 161.091)=9.143, p<.001, \eta^2=.057$)。多重比較を行ったところ、「平成重視群」 ($M=2.77, SD=1.22$) と「令和重視群」 ($M=2.65, SD=1.35$) は「非視聴群」 ($M=2.07, SD=1.34$) よりも、天皇の役割として「寄り添い・外交」に対する期待が大きいことが明らかとなった。

コスモポリタニズム意識では、地球運命共同体意識でのみクラスターの有意

な主効果が認められた ($F(2, 172.654)=4.168, p<.05, \eta^2=.002$)。多重比較を行ったところ、「平成重視群」($M=.218, SD=0.77$)は「非視聴群」($M=-.110, SD=0.95$)よりも有意に得点が高かった(図7参照)。

考 察

本稿の目的は、平成から令和への天皇退位・即位関連の儀式と行事に、日本人はテレビ各局が放送した特集番組を通してどの程度参加したのか、そのようなメディア・イベントへの参加と日本人意識・コスモポリタニズム意識はどのように関連しているのかを明らかにすることであった。

調査の結果、最も関心が高かったのは新元号(の発表)であり、その他の退位・即位関連儀式への関心は相対的に低かった。また、皇室への意識も含めた日本人意識は、テレビで中継されるメディア・イベントと化した儀式への参加と関連していること、日本人意識が相対的に低い人たちは、そうした儀式を一切視聴していなかったことが明らかにされた。

以下では、各儀式・行事に対する国民の関心の高さ、日本人意識・グローバル意識と儀式・行事の視聴との関係について順に考察する。

退位・即位関連の儀式・行事に対する国民の関心の高さ

調査の結果、平成から令和への代替わりにおいて、日本人が最も関心を抱いていたのは、新元号であったことが明らかになった。今日、我々が元号を使用するのは役所に提出する書類や履歴書などに限られているのではない。組織によっては西暦のみが使用され、いわゆる和暦は使用されない。それにもかかわらず、日本人は天皇の退位や即位そのものではなく、それに伴って変更される元号に関心を抱き、その発表が平日の昼間であったにもかかわらずテレビやインターネットで新しい元号をいち早く知ろうとしたのである。退位する天皇、新しく即位する天皇の顔を知らない日本人はいないが、元号については発表されるその瞬間まで知ることができない。そのことによって、日本人は発表と同時に知りたいという動機が強くなったのかもし

れない。メディアはそうした視聴者の「知りたい」という気持ちに応え、元号発表後の解説においては視聴者たちの知るための努力が意味のあるものであることを演出したのではないか。テレビ番組の中で元号は日本にしかないこと、元号に込められた意味、元号の決定プロセスを細かく解説し、元号を特別視し、そのような元号を持つ国の国民であることを視聴者に誇らしく思わせた可能性がある。

天皇の退位・即位に関わる厳かな儀式を視聴できる機会はそう多くはない。それにもかかわらず、退位礼正殿の儀、剣璽等承継の儀・即位後朝見の儀、即位礼正殿の儀を視聴した調査協力者は多くはなかった。これらの儀式が行われた4月30日、5月1日、10月22日は「国民の祝日」であったにもかかわらず、日本中の人たちがテレビの前に鎮座し天皇の一举手一投足に注目するということはなかったのである。堅苦しい儀式となることが予想され、それを一国民としてどう視聴したらよいかわからなかったのではないか。厳かな儀式をテレビ画面越しとはいえ見るからにはスマートフォンをいじる、別のことをしながら視聴することが憚られたのかもしれない。つまり、宮廷松の間などの儀式が行われた格式高い場所はテレビ画面を通して私たちの自宅のリビングとつながっていたため、正装が求められ選ばれた人々しか参列できないような堅苦しい儀式をテレビ画面越しに見る、つまり儀式に参加することは憚られたのではないか。

他方、11月10日に行われた祝賀パレードは5割弱の調査協力者が視聴した。厳かな雰囲気の中で行われる退位礼正殿の儀や剣璽等承継の儀とは異なり、テレビの前で国民は鎮座する必要はない。天皇と皇后はオープンカーから私たち国民に笑顔で手を振ってくれる、皇室の人々が私たちにお手振りというサービスをしてくれるいわばイベントであり、堅苦しい解説がなければわからない儀式ではない。パレードとは、国民にとって大スターである天皇・皇后はじめ皇室の人たちを祝福できるメディア・イベントなのであろう。

日本人意識・グローバル意識と儀式・行事のテレビ視聴との関わり

前節で、天皇の代替わりに際し、その関心の高さは儀式・行事によって異なることを述べた。ここではそうした関心の高さど日本人意識、グローバル意識との関連について考察する。

まず、退位・即位関連の儀式・行事の視聴パターンは大きく3つに分かれることが明らかとなった。このことは、日本の象徴である天皇の退位・即位に際して、何を見て何を見ないが国民の間で分かれていることを意味する。換言すれば、国民の祝日とした儀式を国民全員がテレビという媒体を通して見たわけではない、つまり元号まで変わる一世一代の儀式は国民全員にとって、重要なメディア・イベントではなかったのである。特に調査協力者の約半数を占めた「非視聴群」は一切の儀式・行事を視聴せず、皇室に対する親しみは他の人たちよりも、尊敬の念は「平成重視群」の人たちよりも低く、こうした層が今後ますます大きな割合を占めていくならば、どのようなことが起こりうるだろうか。我々が天皇の人となりや働きについて知ることができるのは、主にテレビの報道を通してであろう。それをしない人たちが増えれば、象徴としての天皇の存在意義が危ぶまれるかもしれない。「非視聴群」の存在の大きさは、人々の間でマス・メディア以外のメディア利用が進む中で、国民統合の象徴である天皇・皇室の存在を国民に知らしめることを難しくさせることを示唆していよう。

しかし、代替わりの儀式・行事の視聴パターンによって程度の差はあるものの、天皇に期待する役割としては、国事行為などよりも国民に寄り添うことや皇室外交に務めることが期待されていた。寄り添いや皇室外交は平成天皇時代に確立されたといわれているが、令和時代へも引き継がれることが多くの国民から期待されていると考えられる。

また、「非視聴群」の人たちは、日本人の条件、日本の誇りなどの日本人意識やコスモポリタニズム意識の多くにおいて、「平成視聴群」もしくは「平成重視群」と「令和視聴群」の人たちよりも意識が低かった。つまり、「非視聴群」は日本人としての社会的アイデンティティが他の人たちに比べ

肯定的な度合いが低く、日本と他国との関係に対する関心も低いのである。儀式・行事を一切視聴しなかったのは、日本人意識の低さもしくは日本人アイデンティティは彼らにとって重要ではないことが理由であろう。

日本人意識の多くの側面、コスモポリタニズム意識の下位尺度である地球運命共同体意識において、最も肯定的であった「平成重視群」は日本を愛し日本人であることに誇りに思っているからこそ、国家存続のためには諸外国との共存が重要であると認識していると解釈できる。つまり、日本人意識とコスモポリタニズム意識は、相反するものではなく並存すると考えられる。彼らは、上皇が天皇から退く瞬間である退位礼正殿の儀をテレビで共視聴した。地下鉄サリン事件（1995年3月）のような日本社会全体を震撼させた事件、阪神淡路大震災（1995年1月）をはじめ次々と日本を襲った自然災害の数々により、平成という時代は日本人にとって決して安寧の時代ではなかった。しかし、国民が苦しむ度に、当時の天皇・皇后は膝を折り人々に寄り添った。その姿は、老若男女を問わず利用可能なテレビの画面に映し出された。「平成視聴群」の人たちは、そのような平成時代を教訓とし、諸外国との共存こそが日本の未来にとって重要であると考えているのではないか。

他方、「令和重視群」は、ナショナリズム・愛国心の下位尺度であるナショナリズム、日本の誇りの下位尺度である伝統において、「平成重視群」よりも得点が有意に低かったことから、古き良き日本を大切に思う気持ちが薄いと考えらえる。それにもかかわらず、「剣璽等承継の儀・即位後朝見の儀」よりも「即位礼正殿の儀」、さらには「祝賀パレード」と、令和の新しい天皇の即位後に、儀式・行事を視聴する割合が高くなっていった。このことから、彼らは未来志向であり、新しい令和の時代に対する思いが強いと思われる。

本研究の意義と今後の展望

本研究はメディア利用と日本人意識の関連について検討する一貫として、時代の節目のメディア・イベントと称される天皇の退位・即位関連の儀式・

行事の中継視聴パターンと日本人意識・コスモポリタニズム意識との関連を検討した。調査データから、国民的イベントであってもその視聴パターンは一樣ではないことが明らかにされた。象徴天皇の存在や働きをメディアでどう国民に伝えるべきかに関し検討の余地があることが示された。

また、視聴パターンによって日本人意識が異なることが明らかとなった。このことは、国民的なメディア・イベントへの参加程度により、個人の日本人意識を予測できる可能性があることを示唆している。今回のメディア・イベントは日本人意識と関連が深いものであったため、コスモポリタニズム意識との関連性はあまりみられなかったが、諸外国が関連するメディア・イベントや諸外国の報道が関連する場合は、コスモポリタニズム意識によるメディア接触の差異がより顕著に表れるのではないか。

昨今のメディア利用は、特に若い世代において変化が著しい。他方、高齢者においては旧来のメディアが利用されているため、メディア利用における世代間の分断があるといっても過言ではない。そのような中で、メディア利用と日本人意識やコスモポリタニズム意識について検討する際には、世代間の検討や年齢も考慮に入れた分析を行うことで、メディア利用の違いによる影響を明らかにできると思われる。

引用文献

- 有馬明恵 (2020). 平成から令和へ、その時、テレビは何を伝えたのか—新元号発表日・退位の日・即位の日の報道特集番組の内容分析から マス・コミュニケーション研究, 97, 203–204.
- Iwasaki, A. & Grubaugh, N. D. (2020). Why does Japan have so few cases of COVID-19? *EMBO Molecular Medicine*, 12. doi.org/10.15252/emmm.202012481
- 岩田紀 (1989). コスモポリタニズム尺度に関する経験的検討 社会心理学研究, 4, 54–63.
- Karasawa, M. (2002). Patriotism, nationalism, and internationalism among Japanese citizens: An etic-emic approach. *Political Psychology*, 23(4), 645–666.
- NHK 放送文化研究所 (2019). 第10回「日本人の意識」調査(2018)結果の概要 (https://www.nhk.or.jp/bunken/research/yoron/pdf/20190107_1.pdf, 2022年10月16日確認).
- 斉藤太郎 (2020). コロナ死者が少ないのは「民度が違うから」 麻生太郎氏 朝日新聞デジタル 6月4日 (<https://www.asahi.com/articles/ASN6455CGN64UTFK008>).

html, 2022年10月14日確認).

Tajfel, H. & Turner, J.C. (1986). The social identity theory of intergroup behavior. In S. Worchel, & W. G. Austin (Eds.), *Psychology of Intergroup Relation*, (pp. 7-24). Chicago: Hall Publishers.

田辺俊介(編)(2016). 現代日本におけるナショナリズムと政治—時点/国際比較による実証研究— 2013-2015年度科学研究費補助金研究成果報告書(課題番号: 25285146) (<http://www.waseda.jp/prj-ipa/Report2016.pdf>, 2020年8月14日確認).

辻大介(2008). インターネットにおける「右傾化」現象に関する実証研究調査概要報告書 日本証券奨学財団助成研究報告書 (<http://d-tsuji.com/paper/r04/report04.pdf>, 2020年8月14日確認).

キーワード

退位・即位関連儀式・行事、テレビ中継、日本人意識、コスモポリタニズム意識